

國學院大學學術情報リポジトリ

「雉鳩」考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉, 鴻春, Wu, Hongchun メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000012

「睢鳩」考

呉 鴻春

はじめに

『論語』の中で、孔子はいくつかの箇所ですべて『詩』を学ぶ意義に言及している。その中に「多識於鳥獸草木之名。」（多く鳥獸草木の名を知る）というくだりがある。当時はこの「鳥獸草木」の名称について共通の理解があったはずであるが、時代が遠ざかったことと歴史的にさまざまな解釈があるため、今日ではその中のいくつかの名称を理解するのにかんがりの難しさがある。

『詩経』巻頭の作である「関雎」の第一章はこうなっている。

關關雎鳩，在河之洲。 関関たる雎鳩は、河の洲に在り、

窈窕淑女，君子好逑。 窈窕たる淑女は、君子の好き迷。

詩の中の「雎鳩」とはどのような鳥であろうか。昔からいろいろの説があるが、人を信服させる解釈を見つけないのはむしろしく、しかも、あのように多くの解釈が存在すること自体、これが一つの難題であることを示している。

本稿は、雎鳩の解釈については先ず三つの面に留意しなくて

はならないことを指摘し、あわせて自らの解釈を提起しようとするものである。

一、「雉鳩」についての歴史上の主要な解釈

『詩経』のただ一つの伝本は『毛詩』、すなわち毛亨が伝えたものである。毛亨は雉鳩は「王雉」¹であると言っている。

唐の孔穎達は、毛亨は『爾雅・釋鳥』の説明を踏襲したと指摘している。²『爾雅注疏』を調べると、「鴟鳩は、王鴟である」とある。³（鴟と雉は異体字。）これは雉鳩についてのもっとも早い解釈であるが、残念ながら説明のことばが簡単すぎて意味がはっきりしない。王雉とはどんな鳥なのか、私たちには依然として明確でないからである。

『毛詩注疏』の孔穎達の疏はさらに、揚雄、許慎とともに雉鳩を「白鷺、似鷹、尾上白。」⁴（雉鳩は「白鷺」であり、鷹に似て、尾の上は白。）と解釈している、と指摘している。しかし、揚雄の「白鷺」という説について、段玉裁は「所謂揚雄者、今不見於『方言』、未知其所本。」⁵（揚雄の謂うところのものは、今は『方言』には見られず、孔穎達がもとにしたものはわからない）と指摘している。

許慎の『説文解字』は、鴟と鷺をひとしく「王雉」と説明しているが、段玉裁の注は許氏の不備を指摘してこう判断している。「釋鳥」云：「雉鳩、王雉、與「鷺、白鷺」、劃分爲二鳥。許乃一之、恐係轉寫譌誤、非許書本然也、當爲正之。」⁶（爾雅・釋鳥）には「雉鳩は王雉であり」、「鷺は白鷺である」、二種類の鳥として分けている。許氏がそれらを同じ種類にしたのは、おそらく転写の誤りであり、許慎の著作の本来のものではないであろう。それを訂正するべきである。）

段玉裁は揚雄が雉鳩を「白鷺」と解していたことを証明できる証拠はないと考えたのであり、又『説文解字』が雉鳩と鷺をとともに「王雉」と解釈しているのは転写したさいの誤りであると考えたのである。段氏はただ『爾雅・釋鳥』中の「雉鳩は王雉である」という解釈だけを認めているのである。

晋の杜預は『春秋左傳注疏』の注で、毛亨の述べた「鳥鷺而有別」を「鷺而有別」⁷と注釈している。「鷺」を「鷺」に換えている。これによって雉鳩は猛禽の性質をもつようになった。唐の孔穎達はこれをもとに疏を作り、「則鴟鳩是鷺擊之鳥、又能雌雄有別也。」⁸（すなわち鴟鳩は勇猛で攻撃的な鳥であり、さらに雌雄の違いがあることを知っているのである。）としている。鷺と鷺は、古代においては假借として通用するが、しかし

毛伝にある「鳥摯而有別」の「摯」には、「勇猛」という意味はない。漢の鄭玄の箋は「摯」について正確な解釈を下している。「摯之言、至也、謂王雉之鳥雌雄情意至、然而有別。」¹⁰（摯という言葉は、至であり、王雉という鳥は雌雄の情意が真摯ではあるが、雌と雄の違いをわきまえていることを謂う。）と。

従って毛伝の「鳥摯而有別」から雉鳩は猛禽であるという解釈を導き出すことはできないのである。

『爾雅注疏』の晋の郭璞の注には雉鳩は雉のたぐい、「今江東呼之為鶚。」¹¹（今、江東ではこれを鶚（がく、みさこ）と呼んでいる）とある。

三国時代の陸機の『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』には、「幽州人謂之鷲。」¹²（幽州の人はこれを鷲という）とある。

宋の朱熹『詩經集傳』には、「狀類鷲、今江淮間有之。」¹³（姿は鷲に似ていて、いま江淮のあたりにいる）とある。

宋の王質の『詩總聞』には、「所謂鶚、鷲、恐自難從、布穀似可用。」¹⁴（いわゆる鶚、鷲は恐らくそれに従うのは難しい、カッコウとしてよいだろう。）とある。

元の梁益の『詩傳旁通』には、「或謂王雉即今杜鵑云。」¹⁵（ある人は王雉は即ち今のホトトギスであるという。）とある。

國學院大學教授故西岡市祐先生の論文「雉鳩とはどんな鳥か」

は、歴史上のさまざまな解釈に広く当たって、詳細な「雉鳩の解釈伝承表」に列挙されるところにも、ご自身の独自の見方を提起されて、「雉鳩」は「紅翅緑鳩」（アオバト）であるとされている。¹⁶

二、雉鳩の解釈では三つの面に留意すべきである

歴史的に存在するさまざまな解釈のどれかを選ぶに当たって、私たちがむずかしいと思う主要な点は、結論だけがあつて、論証の過程が欠けていることである。雉鳩の解釈についてはまず三つの面に十分な注意を払うべきであり、それが雉鳩を解釈する前提である、と私は考えている。

(一) 水鳥、あるいは水辺に棲息する鳥

詩では「在河之洲」（河の洲にいる）と述べられており、これは無条件に尊重する必要がある。もし水辺に棲息する鳥でない場合は、考慮する範囲から除かなければならない。

ここの「河」が黄河であるかないかは、にわかには断定するのはむずかしい。「河」とは固有名詞で、『詩経』に出てくる河は、多くは「黄河」と理解してよいであろう。たとえば、『邶風・

新臺』に「新臺有泚，河水瀾瀾。」（「新しき台はげにあざやけく、河の水は瀾瀾たり」とあり、『衛風・河廣』に「誰謂河廣，一葦杭之。」（誰か河を広しと謂うや、一もとの葦もて之を杭らん）とあるの等はそうである。しかし、「河』には普通名詞という面もある。たとえば、『鄘風・君子偕老』に「委委佗佗，如山如河，象服是宜。」（委委としてしなやかに佗佗としておだやかに、山の如く河の如きひとは、象もよりの服のこれ宜ろし。）とある。この中の「河』は普通名詞と理解すべきである。「關雎』は『周南』の一首で、周南は周公旦の領地で、岐山の南に位置しているから、黄河からはかなり離れている。従つて「在河之洲』の「河』は普通名詞と理解するのがよいようである。

(二)毛伝の「王雎」の説を重視する

「雉鳩」、毛伝には、「王雎也」とある。

『爾雅・釋鳥』には、「鴝鳩、王雎」とある。

これはもともと早い解釈で、十分に重視する必要がある。

宋の蔡下『毛詩名物解』卷六には、「王、大也、於鴝鳩則爲大矣、故又謂之王。」（王は、大きい意、鴝鳩より大きい、ゆえに王とも言う。）とある。

蔡下がはじめて「王雎」の「王」が大きいという意味である

ことを指摘した。この説明は『爾雅』郭璞の注からヒントを得たものだと考えられる。しかし彼はただ鴝鳩より大きいというだけなので、相対的に大きいという意味になる。彼のこの比較は必ずしも正確とはいえない。王には同類の中でもっとも大きいという意味もあるからである。

たとえば『爾雅・釋魚』には「蟒、王蛇。」とあり、郭璞の注に「蟒、蛇最大者、故曰王蛇。」（蟒は、蛇の中に最大の者だから、王蛇と呼ばれる。）とある。そうなると、「鴝鳩、王雎」は、「鳩類の中で最大の鳥だから、王雎と呼ばれる」と理解するのはもともと自然ではないか。

明の方以智は「王」という字について別の説を示している。

『爾雅』「鴝鳩、王雎。」王即玉也、其屬玉乎？¹⁹（『爾雅』では鴝鳩を王雎と解釈している。王は即ち玉であり、それは「屬玉」という鳥ではないか。）方以智氏は古文字の王は玉に通ずるといふ観点から出発して、雉鳩は「屬玉」（鴛鴦に似た）かもしれないと推測した。しかし、方以智の推測は根拠が十分ではない。少なくとも『爾雅』においては、王と玉とは区別されているからである。

もし私たちが毛伝と『爾雅』の解釈を重視するならば、——私はそうすべきである、そうするしかないと考えるが——小

な鳥類を考慮の範囲から除かなければならない。
 雉の解釈については、あとでまた特に説明する。

(三)「比興」を重視する

風、賦、比、興、雅、頌は『詩』の六義である。簡単に言えば、風雅頌は内容と様式に関するものであり、賦比興は創作手法に関するものである。

「關雉鳩、在河之洲。」毛亨の伝は「興也」としている。

「興」について『毛詩注疏』で唐の孔穎達の疏は、「司農又云、『興者託事於物』、則興者起也、取譬引類、起發已心。詩文諸舉草木鳥獸以見意者、皆興辭也。」²⁰⁾（司農（鄭玄）はまたこう言う。「興というのは、言いたい事を物を託して表現する。」即ち、興は起こしである。比喩を取り、類似のものを引き、作者の心を起こして表現する。詩文の中で、草木鳥獸を挙げて作者の意を表現するのは、皆、興の言葉である。）」と述べている。

朱熹『詩經集傳』卷一は先ず「興」について明確で分かりやすい定義を与え、その後で「關雉」一章的「興」について詳細で具体的な説明をしており、参考とするに足りる。

「興者、先言他物以引起所詠之辭也。……言彼關雉然之雉鳩則相與和鳴於河洲之上矣、此窈窕之淑女則豈非君子之善匹乎。

言其相與和樂而恭敬、亦若雉鳩之情摯而有別也。後凡言興者其文意皆放此云。」²¹⁾

（「興とは、先に他の物を言って、それによって詠みたいことを引き起こす言葉である。……言っているのは、あの河の中洲で雉鳩がすでに関雉という声を発して、仲良く雌雄一緒に鳴いている。この窈窕たる淑女は君子に相応しいよきつれ合いではないか、ということである。君子とつれ合いが仲良くお互いに恭敬の念を持っていることも、雉鳩の情が真摯でありながら雌雄の分別を知るといふことと似ている、ということである。後『詩經』の「関雉」以後の作品）にすべての「興」と言われるところの文意は、皆この表現をまねたものである。」）

「他物」と詩人が詠うものとの間には、当然ある種のイメージの上でのつながりがなければならない。雉鳩と君子の好迷（よきつれあい）である淑女とは形象の上である種の共通性があると考えられる。

したがって、性質が勇猛で凶暴な鳥類は除かなければならない。

以上が私の考える所の「雉鳩」を解釈するに当たって注意すべき三つの前提条件である。

三、『侘僚軒說經』の解釈

『侘僚軒說經』は吳秋輝氏の著作である。

吳秋輝が生涯で著わした四十数種の著作の大部分は最近まで出版されていなかったため、彼の名声はまだ広く人の知るところとなっていない。しかし彼は二十世紀初期の中国の傑出した訓詁学者、古文字学者、歴史学者である。ここで彼について簡略に紹介する必要があるだろう。

吳秋輝氏は一八七六年に生まれ、一九二七年に亡くなった。山東省の人で、自ら侘僚生と名のり、齋名を侘僚軒と名付けた。『離騷』の「忱鬱邑余侘僚兮」（王逸注に「侘僚は才能があるのに志を得られない貌」とある）という意を取ったものである。吳秋輝氏は学問にすぐれているが、性格にはそうとう風変わりなところがあった。

梁啓超は吳秋輝氏の学問については大いに褒め称えている。

一九二六年梁啓超は吳秋輝への返信の中でこう述べている。「先生識力、横絶一世、而所憑藉之工具極篤實、二千年學術大革命事業、決能成就、啓超深信不疑。大著不可不謀全部公之天下。」²⁾（先生の見識は一時代を超えている。その依るところの方法は

きわめて篤實であり、（先生のご抱負である）二千年の學術の大革命の事業が必ず成就することを、私は深く信じて疑わない。大著はすべてを天下に公にすることを謀らなければならぬ。）

その時、梁啓超は清華大学国学研究所に在職中で、吳秋輝を招聘して清華大学で指導教授に任じた。北京大学も人を派遣して吳氏を礼をもって迎えたが、吳氏はすでに病に冒され、翌年春、濟南で亡くなった。

近年、吳秋輝氏の著作はあらためて注目されている。齊魯書社が『侘僚軒文存』を出版し、北京図書館は影印で『侘僚軒說經』手稿本を出版した。齊魯書社はさらに影印で『侘僚軒說經』膳清普及本を出版した。二〇一〇年中国国家図書館出版社は三千頁を超える大部の《吳秋輝遺稿》五冊を出版し、吳氏の現存する重要な著作は基本的に出そろったのである。

吳秋輝氏の唯鳩の解釈は、二つの資料で見ることができ。

(一)前四川大学中文系主任の張默生の著作『異行傳・學術界傑出 吳秋輝先生』

『異行傳』は、東方書社から初版が一九四四年に出版された。文中に著者が直接吳氏が『詩経』について語るのを聞いた情景

が記録されている。「睢鳩」について呉秋輝は次のように述べている。「睢」は一種の形容詞で、「睢」の左側の「且」は「祖」という字の古字で、「大」という字の解である。右側の「佳」という字は特別に付け加えたものである。睢鳩はすなわち大鳩であり、鳩類の中でもっとも大きなのは鴻雁である。この種の鳥をもつてきて君子と淑女に譬えるのは、ちょうどびつたり適合すると言えよう。」²³⁾

呉秋輝が言うところの「且」は「祖」の古字であるということとは、清の阮元の「釋且」に「且、古祖字也。古文祖皆且字……小篆始左示作祖」(且は古くは祖という字である。古文の祖はすべて且という字である……小篆は初めて左に示を入れて祖とした)とされていることで、証明される。

(二) 『侘僂軒說經』卷九「睢鳩」

呉秋輝氏は「睢鳩」についてつぎのように述べている。

「睢鳩實爲鴻雁之古名，在周世即不復行用。此詩之作，至晚亦須在紂之初年。其時文字尚未大變更，故猶沿用之。若邨子所言乃古代事，更不得不歷舉其古名，此其所以此外絕不復見於載籍也。至睢鳩何以即爲鴻雁，則鴻雁不再匹，而又整肅不相狎侮，此世人所熟知，正毛氏之所謂「摯而有別」者。」²⁴⁾

(「睢鳩は実に鴻雁の古名であり、周の時すでに使われなくなった。『閔睢』の詩の作られた時期は、遅くても商の紂の初年であるはずである。其の時、言語文字はまだ大きな変更がないので、古い名をそのまま使っていた。〔左伝〕に邨子が言っているのは古代の事なので、当然「睢鳩」という古い名を挙げなければならぬ。これが、「睢鳩」という名がほかの古籍には絶対に見えない原因である。では、「睢鳩」なぜ即ち「鴻雁」であるのか。それは「鴻雁」は雌雄が結ばれば、二度とほかのものとは組まない。また態度が肅然としていて雌雄が軽々しく接しない。これは世の中の人によく知られているところで、正に毛氏が謂う所の「摯而有別」である。)

また「睢鳩」から「鴻雁」に変わる時期については、呉氏はこう述べている。「至睢鳩變而爲雁，周初已然，『九鼓』之詩是也。此所以有此變革者，乃受文字上變遷之影響。此但觀於周以前禽鳥之有專名者甚少，即可想知之。」(「睢鳩が變わって雁になったことについては、周の初年にすでにそうなっていた。『詩經 九鼓』の詩がその例である。このような変革が現れるのは、言語文字の変化の影響を受けたからである。このことについては、周以前に禽鳥が固有の名前を持っているのはとても少かったという点を見れば、推して知るべしである。)

四、私の見方

呉秋輝氏の「雉」についての分析は、説得力があると同時に、『爾雅』の解釈「王雉」の「王」の意味とも暗合している。呉氏の「鴻雁」説はとても優れた解釈だと思われる。

しかし、呉氏の結論をそのまま受けるには、ちょっと躊躇がある。それは漢の揚雄の『羽獵賦』の中に「王雉關關、鴻雁嚶嚶」という文があるからである。明らかに揚雄はこれが二種類の異なる鳥であると見ている。揚雄は文学者であるだけでなく、言語学者でもあり、著作には中国の最初の方言辞典である『輶軒使者絶代語釋別國方言』（略称『方言』）がある。揚雄は前漢の末の人で、古を去ること遠からず、彼が二者を区別していたことはとうぜん十分に信頼できることである。

この点を含んで、以上に述べた三つの面からの要求を考慮すれば、鴻雁より大きい白鳥がもっとも条件にかなうのではないかと私は考える。

世界には合計六種類の白鳥がおり、中国には三種が棲息している。大白鳥、こぶ白鳥は中国で繁殖し、越冬するが、小白鳥は中国で越冬するだけである。白鳥は主に河川や湖、沼沢に棲

息し、水鳥の中では個体がもっとも大きな群体である。小白鳥の体長で百二十センチあり（鴻雁の体長は九十センチ）、大白鳥とこぶ白鳥はさらに大きい。それで白鳥が雉鳩（大鳩）、王雉とよばれるのは、名実合い伴うことができる。この三種の白鳥の羽毛はいずれも純白色で、姿は美しい。主に植物を食べ、水中の動物質の食物も雑食するが、性質は温和である。鳴き声も擬音語の「関関」に近い。その上伝説中の白鳥には一度嫁いだら添い遂げるといふ美德もあるので、白鳥を君子のよきつれ合いである淑女に譬えるのは、ほんとうにふさわしく、とても自然である。

このほかに、論拠とすることはできないが、北欧の白鳥伝説、日本各地の羽衣伝説、さらにギリシャ神話中の白鳥、多くの国の民間伝説、神格化した物語の中には、どれにも白鳥の化身があり、しかも白鳥は通常美しい少女の姿をとって現れる。この現象は人類の美感の共通性を反映しており、またある種の意味で雉鳩が白鳥であるという解釈を支えるものである。

先儒、時の賢人の諸説の他に、浅学の身をわきまえず、別に一説を提起して、参考に供する次第である。

注

- (1) 『毛詩注疏』卷一『四庫全書』第69册 台湾商務印書館
- (2) 『毛詩注疏』卷一 孔穎達疏「雉鳩、王雎也。『釋鳥』文。』『四庫全書』第69册 台湾商務印書館
- (3) 『爾雅注疏』卷十『四庫全書』第221册 台湾商務印書館
- (4) 『毛詩注疏』卷一『四庫全書』第69册 台湾商務印書館
- (5) 『說文解字注』P134 上海古籍出版社 1981
- (6) 『說文解字注』P134 上海古籍出版社 1981
- (7) 『春秋左傳注疏』卷四十八『四庫全書』第143册 台湾商務印書館
- (8) 『春秋左傳注疏』卷四十八『四庫全書』第143册 台湾商務印書館
- (9) 『說文解字注』P134段注「古字同」上海古籍出版社 1981
- (10) 『毛詩注疏』卷一『四庫全書』第69册 台湾商務印書館
- (11) 『爾雅注疏』卷十『四庫全書』第221册 台湾商務印書館
- (12) 『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』卷下『四庫全書』第70册 台湾商務印書館
- (13) 『詩經集傳』卷一『四庫全書』第72册 台湾商務印書館
- (14) 『詩總聞』卷一『四庫全書』第72册 台湾商務印書館
- (15) 『詩傳旁通』卷一『四庫全書』第76册 台湾商務印書館
- (16) 『國學院大學紀要』二十五卷 P156 國學院大學 1987
- (17) 『毛詩名物解』卷六『四庫全書』第70册 台湾商務印書館
- (18) 『爾雅注疏』卷十『四庫全書』第221册 台湾商務印書館
- (19) 『通雅』卷四十五『四庫全書』第857册 台湾商務印書館
- (20) 『毛詩注疏』卷一『四庫全書』第69册 台湾商務印書館
- (21) 『詩經集傳』卷一『四庫全書』第72册 台湾商務印書館
- (22) 『侘僚軒說經』P5 齊魯書社 2008
- (23) 『異行傳』P150 重慶出版社 1987
- (24) 『侘僚軒說經』P316 齊魯書社 2008
- (25) 『侘僚軒說經』P317 齊魯書社 2008

(26) 『文選』P134 中華書局 1977
 付記 『詩經』國風の詩句の訓詁は、吉川幸次郎『詩經國風』上(岩波詩人選集1)に依った。